

ジェニファー・ラブ・ヒューイットの玉潰し

Night of Love by dbud

- 1 -

1

俺はクラブ通いをするタイプじゃないが、その夜ばかりは、出かける決心をしたことを神に感謝した。

そこで俺は彼女に出会い、意気投合した。彼女は映画のなかで見るより、ゴージャスだった。彼女が微笑むだけで、俺は天にも昇る心地だ。



クラブに入っすぐ、俺は彼女がいることに気づいた。俺は彼女が「五人のパーティ」でテレビデビューして以来のファンだったからだ。俺は彼女を見たいだけの理由で、あのくだらない番組を見た。彼女は俺より五歳ほど年下で、たしか当時、十六歳。なのにボディだけは二十代のそれだった。細いけど、女らしい曲線に溢れ、しかも豊かな胸。

- 2 -

その彼女が、音楽に合わせて身体をくねらせ、俺のすぐそばで踊っていたんだ。相手はいなかった。たった一人、陶酔しきっていた。両手を頭上にあげ、手首を交差させ、大きな胸を張り、リズムにのって腰をくねらせていた。タイトなレザーの黒いホットパンツに、レースのブラジャーが透けて見えるシースルーのシャツ。セクシーなパンプスにネックレス。彼女がゆつくりとターンし、こちらに背を向けた。丸いかたちのいいお尻がくつきりと浮かび上がっている。思った以上に小柄だった。せいぜい163センチくらいだろう。それも、7〜8センチのヒールを履いて、だ。

彼女がのけぞった。顔を天井に向け、長い豊かなブラウンの髪の毛が床に向かって垂れ、お尻のあたりでゆらゆらと揺れた。

再び彼女がターンしてこちらに顔を向けた。シースルーのシャツから、ブラをはじき飛ばしそうなほど溢れだしている豊かな乳房が見えた。俺が見つめていることに気づいていないのだろう。彼女は、まるで俺に胸を見せつけるようなポーズをとっている。音楽が激しくなった。彼女の動きも激しくなり、それにつれて乳房が前後左右にゆさゆさと揺れる。俺の目は釘付けになった。

不意に彼女の動きがとまった。その目がまっすぐ俺を見上げている（俺は彼女より、30センチは長身だった）。俺はどきまぎした。彼女が叫ぶか、平手打ちを浴びせるか、黙って立ち去る

か、いずれかだろうと思ったが、意外なことに、彼女は微笑んだ。完璧な笑顔だった。白い歯が見えた。彼女は小首をかわいらしく傾げ、手を胸に当ててこう言ったのだ。

「これ見るの、好きなの？」

俺は、酔っぱらいのように、うなずくだけだった。

すると、彼女は俺に近寄り、両手を伸ばして俺の首にかけ、右脚を俺の腰に巻き付けたのだ。そのすばらしいボディを俺に押しつけ、俺のふとももを股で挟み込んだ。

「好きにしているのよ」

彼女が耳元でささやいた。

「気持ちいいこと、して」

俺は耳を疑った。彼女がくすくす笑う。俺の身体がまず反応した。俺はその小柄な身体を両手でつかみ、ぐっと引き寄せた。

思わぬ幸運を放すまいとするように。

そして俺は彼女に導かれるままにダンスフロアを出て、VIPエリアに向かった。ボーイが恭しく挨拶する。こんな扱いを受けたのは初めてだが、もちろん、ジェニファーが一緒だからだ。

VIPエリアには大きなカウチがあり、俺はそこに押し倒された。ジェニファーが俺にのしか

かり、唇に舌を入れながら、自分の股間を俺の股間に押しつける。俺は左手を彼女のシャツに滑り込ませ、掌にあまる乳房を柔らかく揉みしだいた。彼女の息づかいが荒くなる。

間違いない、彼女は、やりたがっている。

彼女が顔をあげた。間近にみるその妖艶な笑顔は、とても美しかった。ブラウンの瞳が潤み、赤い唇をセクシーに嘗めている。

俺は、自分の容貌にはいささか自信があった。だが、まさか、こんなところで、ジェニファー・ラブ・ヒューイットに誘われるとは、想像すらしなかった。彼女にキスされ、レザーごしに彼女の陰部を太股に押しつけられ、その美しく大きな乳房は俺の手の中にあるなんて、誰が予想できただろう。

彼女は俺の股間をのぞきこみ、くすくす笑った。勃起したペニスでデニムのジーンズを押し上げている。「ちよつと失礼するわ」

彼女は立ち上がり、手洗いに向かった。

俺は数分ほど、一人でシャンペンを飲んだ。ウェイトレスが通りかかる度に、勃起しっぱなしの股間を隠すため、身体をずらしたり、よじったりした。なれない場所だけに居心地が悪い。

「いや、しかし」

俺は思った。

「まさか、これで終わってわけじゃないだろう。まだもっと、続きがあるはずだ。こいつを満足させるような続きが……たぶん、一晩中」

考えるうちに、次第に気分がハイになってきた。シャンパンのせいかな、思わぬ幸運のせいかな、いや、何かおかしい。視界が霞み、頭のなかにもやががかったようだ。

体がふらふらする。シャンパングラスをとろうとして、手が滑った。グラスは床でくだけ散った。

再び彼女が姿を見せた。

こちらに歩いてくる優美な姿に、俺は見入った。引き締まったお尻が左右に揺れ、二つの乳房が上下に揺れている。

彼女は俺の隣に座った。

「気分はどう？」

彼女は俺の胸に指を這わせながら訊ね、ちらりと床に散らばったガラスの破片に眼をやった。

「なんだか気分がハイなんだ。シャンパンのせいかな」

「そうよ。だってドラッグ入りなもの」

彼女はくっくっくと喉を鳴らして笑った。

「ドラッグ？」

「大丈夫、一錠だけよ」

彼女の口調はやや呂律が回っていないかったが、それも納得できた。彼女は、自分のグラスに口をつけて言った。

「あと何秒かしたら、効果が現れるわ。そうなったら、ここを出ましょう」

「どこにいくの？」

俺は訊ねた。頭がぐらぐら揺れ、ひどく重く感じられた。

「私の家よ」

「すりやすごいや……そこで何して遊ぶの？」

俺は典型的な酔っぱらいの笑顔を浮かべた。彼女はソファに膝を乗せ、俺によりかかってきた。

「ありとあらゆる楽しいこと」

彼女は言いながら、俺の額をなめた。それから立ち上がり、俺の腕をとった。ハンドバッグを拾い上げると、俺を導いてクラブを出て、ばかどかいリムジンに乗り込んだ。

自動車が停まった。彼女は、ふらふらになった俺の腕をつかんで車の外に引っ張りだした。見上げると、超高層のマンションだった。

エレベーターで何階まであがったろう。ドアが開いて廊下に出ると、彼女は一つのドアの鍵をあけた。

豪華としか形容のしようのない部屋だった。ジェニファーは俺をベッドルームまで引っ張っていき、ベッドに寝かせると、俺は前後不覚に陥った。

最後に視界に映ったのは、微笑んで俺を見下ろす彼女の美しい顔だった。

眼が醒めた。

俺は体を起こそうとして、気づいた。俺の両腕は背後に回され、縛られていた。ベッドの上で縛られ、しかも全裸だったのだ。小さなランプとキャンドルが、薄暗いベッドルームをほの暗く照らしていた。

「いったいどのくらい眠っていたのか分からなかった。俺は頭を振り、記憶を取り戻そうとした。

「あら、起きたのね」

ジェニファーが歩み寄ってきた。その艶やかな微笑みに、俺は嬉しくなったが、すぐに自分が置かれた状況を思い出し、悪寒が走った。

「おい、これはなんの真似だ？」

俺は上半身を起こしてベッドに端ににじりよって立ち上がった。手首を動かそうとしたが、テープで何重にもぐるぐる巻きにしたらしく、びくりとも動かない。

「いくら有名人だからって、していいことと悪いことがあるぞ。俺をセックスの奴隷にするつもりか？俺にはこんな趣味はねえんだ。すぐにほどこいてくれ」

「いいわよ」

彼女は答え、掌を上に向けて差し出した。

「その前に、これを飲んで」

俺はベッドを下りてのぞきこんだ。彼女の掌に、青い錠剤が二つ乗っていた。

「なんだそりゃ。バイアクラか？」

俺は訊ねた。彼女は頷いた。

「何考えてんだよ、そんなもの飲むか、この変態女！」

叫んだ瞬間、彼女は一歩前に踏み出した。

次の瞬間、彼女の足が俺の股間を目掛けて飛んできた。

「うううっ！」

俺はうめいた。

俺は床に膝をついていた。上半身を折り曲げ、はげしく咳き込んだ。

息ができない。信じがたい激痛が下半身全体を包んでいた。

俺は口をばくばくさせたが、声にならなかった。

小さいころ、野球をやっていて、打球を股間に当ててしまったことがある。この世にこんな痛みがあるとは思ってもいなかった。だが、いま味わっている苦痛は、あのとときの十倍以上だった。

なにせ剥き出しの睾丸を、思い切り蹴り上げられたのだから。

俺は両手で股間を押さえたかった。だが、両手は縛られている。体を伸ばそうとしたが、全身に錘を乗せたように動かない。

頭髮に痛みが走った。ジェニファーは俺の髪の毛をぐいとつかんだのだ。

彼女は俺の顔を強引に起こし、顔をのぞきこんだ。

「変態って言ったわね。そのとおりよ。これが大好きなの」

言うなり、彼女の右足が後ろに引かれた。俺は叫ぼうとしたが、これも声にならなかった。彼女の足が、再び俺の睾丸に叩きつけられた。

睾丸が爆発したように感じた。俺は前のめりにくずおれそうになったが、彼女に頭髮を掴まれていた。眼に涙が溢れた。ぼろぼろと涙をこぼしながら、俺は口をばくばく動かし、自分の苦しみを訴えようとした。その開いた口に、彼女は錠剤を放り込み、グラスの水を流し込んだ。錠剤は俺の喉から食道に嚥下された。

「素直に飲めばよかったのに」

彼女はそう言い、俺の頭を後ろにおしやった。膝立ちしていた俺は、ぶざまに両脚を広げて尻餅をついた。

三度目の蹴りが、俺の睾丸を襲った。全身を炎が貫いた。俺は海老のように体を折り曲げ、床

に転がり悶絶した。

彼女は哄笑し、ベッドルームから出ていった。形のいい素晴らしい脚が動いて、ドアの外に消えていった。

彼女が戻ってきたのは、15分ほど後だった。

俺は同じ場所に同じ姿勢で転がっていた。この間、やっと体を動かせるまでに回復した俺は、なんとかかいましめを解こうともがいてみたが、無駄だった。三度の股間蹴りで、力が失われていたのだ。

そのかわり、錠剤を飲まされて数分後には、ペニスがむくむくと鎌首をもたげ、いまや岩のように固く勃起していた。通常の大きさよりも膨れ上がっていたのは、錠剤の効果だろう。

彼女が戻ってきた時点でも、俺の睾丸は凄まじい激痛に包まれ、下腹部がひきつったように痛んでいた。俺は両脚を大きく広げていた。太股がちよつと触っただけでも、飛び上がりそうな痛みが全身に走るからだ。

だが、ジェニファーが歩み寄ってきたのを見て、俺は脚を閉じ、なんとか起き上がるうもがいた。だが、ジェニファーは俺の傍らに膝をつくと、仰向けになるように押しやった。

「気分はどう？」

彼女は言いながら、俺の股間に手をのばした。びっくりとしたが、彼女は陰囊には触れず、俺の

ペニスをつかみ、尻が持ち上がるくらい上に引っ張った。

「悪くないわね。もう少し長いといいんだけど、このくらいでも十分よ」

彼女はペニスから手を離し、俺の腕をつかんで命令した。

「立ちなさい。さもないと、もう一度、金玉を蹴りあげるわよ！」

俺は従うしかなかった。彼女は俺をベッドに押し倒した。

「いったい何をするつもりだ？」

俺は恐怖を押し殺して訊ねた。彼女は微笑みだけで答えなかった。クラブで見たときは、この世のものとは思えないパーフェクトな微笑みだったが、いまや、恐怖をもたらすものでしかなかった。

2

ジェニファーは大きな箆筍に歩み寄り、三本の長いシルクのスカーフを持って戻ってきた。そのなかの一つを、俺の右の足首に巻き付け、ベッドの柱にしつかりと結び付けた。左の足首も同様に、シルク・スカーフで向かい側のベッドの柱に結びつけられた。俺の両脚は、大きく広げた形で固定され、股間が無防備にさらされた。

ジェニファーは、ベッドの足元でその箇所を見下ろしながら、唇を嘗めていた。そして、シー

スルーのシャツを脱ぎ捨て、ブラとレザールのホットパンツだけになった。そのみごとなボディも、もはや俺の興奮を催さない。

彼女はベッドに飛び乗ると、俺の両脚の間に膝をついた。残る一つのスカートを俺のペニスの根元に巻き付ける。俺のペニスと陰嚢はスカートで固定され、彼女にとっては狙いがつけやすくなった。

最後にきゅっと蝶結びにすると、彼女は掌をこすり合わせ、満足げにうなずいた。

「じゃあ、始めましょうか」

何を？

彼女は俺にのしかかってきた。俺の右脚の太股にまたがり、左手を俺の胸に乗せた。そして、右手で俺の陰嚢をつかみ、やわらかく揉みほぐした。思わぬ快感が走った。

「我慢できなくなったら、そう言ってね」

彼女は微笑み、睾丸をつかんだ右手に力を込めはじめた。

鋭い激痛が蘇った。

彼女は二つの睾丸を掌のなかに収め、五本の指がかわるがわる、すでに痛めつけられた二つの肉塊を圧迫する。その都度、激痛がこみあげる。俺が苦悶の表情を浮かべる度に、圧迫が弱まる。ほっと顔の筋肉が緩むと同時に、またも凄まじい苦しみが襲ってきて、全身の筋肉が強張る。

彼女は、そんな俺の顔と股間を交互に見比べていた。俺があまりの激痛に頭をのけぞらせると、ますます瞳にともった炎が燃え盛る。いったん圧迫がやんで、泣きそうな顔を見ると、魅力的な唇が左右に広がり、愛らしい笑顔が広がる。男の最大の急所を痛めつけながら、俺の反応を楽しんでいるのだ。

「どうしたの？ 我慢できなくなったら、そう言っていいのよ」

言いながら、ぎゅうううつと凄まじい力をこめた。

「ぎゃああああああ!!!」

俺は絶叫し、感電したように上半身を左右に振った。なんとか上半身だけでも起き上がろうとしたが、彼女は左手でしっかりと俺の胸板を抑えている。脚をばたばたさせたが、しっかりと固定されていて、わずかに数ミリ動いただけだった。

「私を見て！」

彼女はいったん手を緩めて命令した。俺はわずかに顔をあげ、涙に濡れた眼で彼女を見た。

彼女は微笑みを消し、唇をかみしめていた。その瞳はしっかりと俺の眼を見据えていた。ゲムじゃない。俺は改めて、恐怖に包まれた。

次の瞬間、彼女はまたも右手に力をこめた。俺は悲鳴をあげ、のけぞった。

「そう、それよ」

彼女は、ぎりぎりと言を絞りながら言った。



「もっと、もっとよ!」
俺は上下に激しく悶絶した。睾丸は火に包まれたようだった。だが、悲鳴をあげるだけの力は残っていなかった。それが彼女を失望させたようだった。
声は出なかった。
「何やってんのよ! もっと叫びなさいよ! やめてくれて言いなさいよ! さもないと、金玉潰すわよ!」

彼女は金切り声を張り上げた。

「ほら! 言つて!」

彼女は、握るだけでは飽き足らず、思い切り引っ張った。睾丸と俺の下腹部を繋ぐ管、そして内臓全体が引きちぎれそうだった。

俺は恐怖に包まれた。俺の睾丸と一緒に、腸や胃袋が抉られるように感じられた。

「助けてくれえ!」

喉から嗄れ声が迸った。

「お願いです! やめてえええええ!!」

彼女の掌からすつと力が抜けた。

痛みはまだ全身を暴れ回っていたが、一種の安堵感がもたらされた。

俺は、42キロを走りおえたマラソンランナーのように、大きく眼を見開き、口を思い切り開けて激しく呼吸しながら、なんとか正常な状態に戻ろうともがいていた。

やっと体が動いた。顔をあげると、ジェニファーは微笑んでいた。

「そう、それを聞きたかったのよ」

彼女は、俺の陰囊を握ったまま、体を浮かせた。

「あなたの弱点も、分かったしね」

それから、俺の太股から腰を持ち上げ、俺の両脚の間に膝をついた。

「勉強になったわ。同じ急所でも、一人ひとり違うのね」

一人ひとり違う?

これまで何人の男をベッドに誘い込み、このような拷問を与えたのだろうか?

そして、彼らはどんな運命を辿ったのだ?

俺は、彼女の顔を見た。その答えのヒントを探るように。
彼女は、あの愛らしい笑顔を浮かべているだけだった。

「いくわよ」

ジェニファーは、甘く囁くように言い、こぼれるような笑顔を見せた。
彼女は、ベッドの両端にしっかりと固定された俺の脚と脚との間に跪き、ぎゅっと陰囊を掴み、
体から引っこ抜かんばかりに上に持ち上げた。

俺の全身が激しく痙攣し、上体がのけ反った。俺の体は、肩と踵がベッドについたまま、アー
チ状に持ち上げられていたのだ。ほぼ全ての体重が、彼女にひどくひねりあげられている睾丸に
かかる形で。

筆舌に尽くしがたい激痛に、全ての神経がわなないた。睾丸をひねられるだけなら、痛みは下
半身だけですむ。だが、このように持ち上げられていると、激痛は身体の中央を貫き、末端のす
みずみまでゆきわたるのだ。

彼女は、ころろと笑い転げながら、30秒ほどの間隔で、持ち上げたり下ろしたりを繰り返
した。その間、俺が味わった苦しみは、どうにも形容のしようがない。

彼女は、小国に侵略してきた大軍のようなものだった。どこに弱点があるかを探り、いったん

探りあてると、その箇所を重点的に攻めてくる。もはやこちらに抵抗する力はなく、彼女は好き
なだけ、好きなように俺をいたぶることができる。

ジェニファーは、じわじわと俺の睾丸に指を深く食い込ませた。その度に俺は、「ぎゃあああ
あああ！」と絶叫する。その悲鳴を聞くと、彼女は満足そうに微笑み、うなずき、眼の輝きが増
す。

「もう、逃げられないわよ」

彼女はそう言い、両手で一個ずつ睾丸をつかみ、全身の力をこめて引っ張った。

全身の血管が切れ、視界が真っ暗になった。

「ぎゃああああああ！！！！ やめてくれえええええ！！！！ い……いた……いたいいい
い！！！！」

俺は必死に懇願した。タフガイだと自認していた俺だが、この激痛の前には、そんな自身は吹
き飛んだ。

彼女の指は、俺の睾丸のなかでも、もっとも敏感な部分に突き立っていた。

「あははははは！」

ジェニファーはけたたましく、狂ったように笑い転げた。彼女は腰をあげ、前ににじり寄り、
俺の睾丸をちようど彼女の陰部の真下、数センチのあたりに持ってきた。そして、さらに力を込

めた。

「うわあああああ!!！」

俺は、体内の空気がからつぽになるまでに悲鳴を迸らせた。

もう、見栄も外聞もない。小柄な女の子に痛めつけられているという屈辱感すら消し飛んだ。苦しい。痛い。気が狂いそうに痛い。

金玉が今にも破裂しそうだ。

俺は顔を左右に振り、涙を滝のように流し、激しく泣き叫んだ。

彼女は、そんな俺を見つめて、唇を嘗めまわしていた。

楽しそうに。

「ぐあああああ!!!!……ぐあ……ぐはっ……うううう」

俺は悲鳴をあげつつづけたが、息がつつかなかった。

声が出なくなったかわりに、全身の筋肉がコントロールを失い、胴体は大きく左右に揺れ、両脚は嵐のなかの木の枝のようにながながく痙攣した。

やがて、彼女は睾丸から両手を離れた。

俺はドサツとベッドに着地した。しばらく、ひくひくと痙攣していた。

安堵は、逆に肉体の痛みを激しくさせた。息をすることもできず、ただ嗚咽だけが喉から漏れ

ていた。

やがて、呼吸ができるようになり、視界がぼんやりと開けてきた。

彼女は、楽しみに俺を見下ろしている。

「お願いです……」

俺は、声を振り絞って嘆願した。

「もうやめてください……死んでしまいます……」

「いや」

彼女は明るく拒絶した。

「始まったばかりじゃない」

言いながら、彼女は親指で俺の睾丸を弾いた。

鋭い痛みが、またも全身を引き裂いた。ひねりあげられるよりも、遙に鋭い痛みだった。

俺はまたも絶叫し、激しく痙攣した。

彼女は、またも俺の弱点を見つけたとばかりに、にこにこ笑いながら、しなやかな細い指で弾きつづけた。

「ぎゃ……ぐう……あがつ……や、やめて……つ、潰れる……」

だが、俺の嘆願など、彼女の心を動かしはしなかった。

それどころか、筋肉質の大男が、みっともなくも嗚咽しながら漏らす泣き言を、心の底からか

の心でいるようだった。

「あら、もっとタフガイかと思っていたけど、たいしたことないのね」

彼女は嘲った。まだまだ満足していないのは明らかだった。さらに勢いをつけて弾いてくる。

またも視界が真っ暗になった。眼球が裏側にひっくりかえった。

とたんに平手打ちが飛んできた。

「ちよっと！ 気絶なんかしないでよ。まだまだ楽しみたいんだから！」

言いながら彼女は右手に拳を固めて後ろにひいた。そして言いおわるなり、睾丸に拳をたたき込んだのだ。

彼女の左手はしっかりと陰囊の根元をつかんでいた。パンチを逃れる術もなかった。

もはや限界だった。俺の全身が大爆発し、細かな肉片となって四散したようだった。そして急速に、意識が薄れていった。

3

「起きて！ ほら、起きてよ！」

鼻孔に激しい衝撃と、つんと焼けるような匂いが襲った。

俺は頭をそらした。

ジェニファーは、俺の鼻孔に、匂い塩をつきつけていたのだ。

意識が明確になってゆくにつれ、股間を中心とした激しい痛みもまた、蘇ってきた。頭がガンガン痛み、嘔吐が腹部から胸にかけて渦巻いていた。

いったい、どのくらい失神していたのかは分からないが、俺はいまだに両手両足を、ベッドの四隅に固定されていた。

「気分はどう？」

彼女は、鼻にかかったような甘い声で訊ねた。ジェニファーは、俺と並んで寝そべっていた。

左の肘をついて頭を掌で支え、右手の指で俺の胸板を撫でている。

「言わなくても……分かるだろ……」

俺はやつと答えた。

「ええ、分かるわよ」

彼女は笑い、眼を輝かせた。

「あなたの金玉を殴ってやったときの顔、見せてあげたかったわ。眼が飛び出しそうになって……ふふ、おかしかった」

「楽しんでくれて……嬉しいよ」

俺はせいっぱい乾いた口調で答えた。



「あら、ほんとよ。こんな楽しい思いは、久しぶりだったのよ」

「楽しい？ この気違い女……」

「ええ、楽しかったわ」

彼女は、俺の罵りを一笑に付した。

「それと、言葉遣いには気をつけたほうがいいわ。まだ終わっていないんだから」

「終わってないだと？」

俺はぎよっとして頭を浮かした。

「これ以上、何をやるっていうんだ？」

彼女は、俺の上に覆いかぶさってきた。俺の胸板の上に、彼女の柔らかな豊かな乳房の温かみが直接伝わってきた。

彼女は全裸だった。

彼女は、俺の股間にまたがった。そして陰部を、俺のペニスの先端にこすりつけてきた。あれだけの痛みにも係わらず、俺のペニスは固く勃起していたのだ。

彼女の息が乱れた。

俺の顔の真上で、完璧な形状の張りのある乳房が、激しく揺れていた。

俺は、眼をそむけたかった。あれだけの苦痛を味わわせた彼女と、同じ快感を共有する気は、これっぽっちもなかった。

だが、身体は俺の気持ちとは正反対の反応を見せた。

彼女の濡れた陰部が、巧みに俺のペニスの先端を刺激し、電気ショックのように快感が伝わってきた。

やがて、彼女はいったん腰を持ち上げ、スムーズな動きで、俺の顔の真上に陰部を移動させ、膝で俺の頭を挟み込んだ。そして左手で俺の頭髪をつかんで持ち上げた。

彼女の愛液が、俺の顔に滴った。

「嘗めなさい！」

命令口調だった。

俺はしばし躊躇ったが、彼女の右手が俺の陰囊を包み込んだ。俺はすぐに舌を突き出し、奉仕を始めた。

「もっとゆっくり！」

指示が飛ぶと同時に、きゅっと彼女の指が俺の睾丸をひねりあげた。俺は

必死で悲鳴をこらえ、全力を振り絞って奉仕した。

やがて彼女は満足したのだろう。睾丸を持つ手を緩めた。

彼女は、激しく身をくねらせ、快感を食った。

彼女の腰が大きく揺れるので、舌が彼女の陰部から離れないよう、俺は必死に顔を動かした。

「ああああ……!!」

彼女は嗚咽に似た歓声をあげはじめた。

「そうよ……その調子よ……もつと……もつとよ……」

数分間、俺は彼女の陰部を嘗めつづけた。

彼女は、あられもなく身を揺すぶり、嬌声をあげつづけたが、時にびたりと動きをとめて、満げに鼻を鳴らしたり、舌打ちしたりする。そういうときは決まって、睾丸をひねられたり、叩かれたりする。

俺は必死で、彼女がいちばん敏感な場所や、彼女がいちばん好きそうな嘗め方を探った。

やがて、彼女は俺の顔から腰を浮かせ、俺の屹立するペニスに、すつかり濡れた陰部を押し当て、腰を沈めた。

「ああっ!!」

彼女は大きく身をのけぞらせ、同時にすごい勢いで腰を上下させた。

凄まじい快感が、俺の下半身を包み込んだ。

ジェニファアの激しく揺れる豊かな乳房や、エクスタシーに包まれた表情を見上げながら、俺は思った。たしかに俺はいま、天国にいる。最初の、地獄のような睾丸責めすえなければ。そして、彼女が性的な満足を得て、俺をそのまま解放してくれるなら。

1分とたたぬうちに、彼女は絶頂に達した。大きく身を震わせ、愉悦に満ちた悲鳴をあげた。

「よかったわよ」

俺の体から滑り下りた彼女は、しばし俺の傍らでエクスタシーに身を委ねていたが、やがて顔をあげ、とろんとした瞳で俺を見つめた。

「安心して。このまま帰しはしないから」

彼女は左手で俺の勃起したペニスをつかんだまま、言った。

そして、俺の両脚の間に座り、それをしごきはじめた。

「ああ!!」

俺は思わずうめいた。すばらしいテクニクだった。

だが、次の瞬間、俺は快楽ではなく、苦痛の悲鳴をはりあげた。

意識を取り戻したとき、俺は下半身全体が火に炙られたような痛みを覚えた。体全体が、石のように重く、意識と肉体とが別々に浮遊しているような感覚だった。それでも、痛みだけは、俺の身体と魂を責め苛んでいた。

ジェニファーは俺の傍らに膝をつき、股間に手を伸ばそうとしていた。

「触らないで……」

俺は弱々しく呻いた。

ジェニファーは無視して、手を伸ばし、俺の股間のあたりをまさぐっていた。不思議なことに、彼女の手で触れられた感覚はまったくなかった。

「かわいそうなことしちゃったね」

彼女はやがて、心から気の毒そうな表情で俺を見た。

「え？」

「ちぎれちゃったわよ」

「え！！」

俺は思わず上半身を起こした。

「そ……それ、ど、どういうこと?!」

吃音で訊ねる俺に、彼女はおかしそうに吹き出した。

「金玉。二つともちぎれちゃったわ」

彼女は右の掌を天井に向けて、俺の目の前に差し出した。血にまみれたぶよぶよの肉塊が二つ、掌の上に乗っていた。

「そ……それ……」

「そ。あんたの金玉。ちぎれてるだけじゃないわ。潰れてしまってる。もうくっつけようがないわね」

俺は自分の股間を見た。陰囊がぺしゃんこになっていた。その底は破れ、血と精液が溢れだしていた。

「ここから五分も歩けば病院があるわ」

彼女は、手を洗うためにバスルームに向かって歩きながら、ひどく事務的な口調で言った。

「早く病院にいったほうがいいわよ」

歩いていけというのか……。そう問おうとしたが、彼女は俺に背中を向けてバスルームに消えた。やがてシャワーの音と、楽しい鼻唄が聞こえてきた。

俺は、自分の精神が混濁し、全身の力が抜け、視界が真っ暗になるのを感じながら、ゆっくりと仰向けに倒れていった。